



TITLE:

最近3年間の尿路結核の臨床統計

AUTHOR(S):

本郷, 美弥; 高橋, 陽一; 松尾, 光雄

CITATION:

本郷, 美弥 ...[et al]. 最近3年間の尿路結核の臨床統計. 泌尿器科紀要
1963, 9(10): 570-578

ISSUE DATE:

1963-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112473>

RIGHT:

最近 3 年間の尿路結核の臨床統計

京都大学医学部泌尿器科教室（主任 稲田 務教授）

講 師 本 郷 美 弥

助 手 高 橋 陽 一

副 手 松 尾 光 雄

STATISTICAL OBSERVATION OF URINARY TUBERCULOSIS
IN RECENT THREE YEARS

Haruya HONGO, Youichi TAKAHASHI and Mitsuo MATSUI

*From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University**(Director Prof. T. Inada, M. D.)*

Statistical observation was carried out on 708 cases with urinary tuberculosis in our department during the period 1960 to 1962, and the results were compared with the former reports.

A every-year-decrease in renal tuberculosis is noted, with a slight preponderance of males. The curve of age distribution has double peak, first between 20—24 years, second between 35—39 years in males and 40—44 in females. The third decade of life still appears the most likely for the manifestation of the disease, but it is seen to transit gradually higher decade. Complication of renal tbc. occurred as follows: vesical tbc. in only 58.3%, the remains could not find out the characteristics of tbc. in the bladder tbc of epididymis in 20.8%, tbc of prostate in 14.4%, tbc of seminal vesicle in 1.6%, stone formation in 2.1%, pulmonary and pleural tbc in 5%.

Surgical manipulation for urinary tbc is decreasing annually and recently two thirds of patients are treated internally in our clinic.

The combination-therapy of the corticosteroids and antituberculous drugs, with good results, has a tendency of its frequent use.

緒 言

尿路結核の臨床統計は数多く発表されて居り、我々の教室では多田¹⁾が1916年から1953年までの外来患者を対象として、大森²⁾が1952年から1957年の主として手術患者を対象として、夫々詳細に発表している。尿路結核に現行の化学療法が開始されてすでに10数年を経たのであるが、ここ数年来当教室では尿路結核症が著減している様に思われ、治療面に於いてもコーチゾン系薬剤の使用が漸く頻繁となりつつある点

などから、頻度や病像に新しい傾向或は変貌を来たしたのではないと思われる。これ等の実体を把握するため著者等は今回1960年から1962年の3年間の当科外来患者を対象とした比較的簡単な統計を行い、主として教室の以前の統計と比較してみた。

文中、多田統計、大森統計のあるのは、特にことわりがない限り前述の期間及び対象のものである。又我々の教室で腎膀胱結核に対し化学療法が用いられ始めたのは1949年以後のことであるが、便宜上これ以前を化学療法期以前、

表1 年度別尿路結核患者頻度

年 度	'50	'51	'52	'53	'54	'55	'56	'57	'58	'59	'60	'61	'62
外 来 患 者 数	1,146	1,518	1,608	1,714	1,933	1,990	2,132	2,255	2,378	2,554	2,703	2,704	3,152
腎 結 核 (新来患者)													
右 (膀胱結核あり/なし)	54 (48/6)	53 (50/3)	50 (43/7)	57 (43/13)	49 (44/5)	44 (36/8)	41 (36/5)	32 (25/7)	37 (29/8)	38 (29/9)	41 (21/20)	40 (23/17)	35 (22/13)
左 (")	74 (68/6)	72 (67/5)	67 (61/6)	68 (55/13)	62 (53/9)	48 (43/5)	41 (34/7)	36 (32/4)	38 (28/10)	36 (19/17)	43 (26/17)	21 (14/7)	18 (9/9)
両側 (")	22 (22/0)	19 (19/0)	12 (11/1)	17 (17/0)	24 (24/0)	10 (10/0)	23 (23/0)	34 (34/0)	32 (32/0)	31 (19/12)	29 (16/13)	18 (11/7)	14 (9/5)
小 計 (")	150 (128/12)	144 (136/8)	129 (115/14)	142 (115/26)	135 (121/14)	102 (89/13)	105 (93/12)	102 (91/11)	107 (89/18)	105 (67/38)	113 (63/50)	79 (48/31)	67 (40/27)
新来腎結核/外来患者数 %	13.10	9.50	8.03	8.30	7.00	5.13	4.93	4.53	4.50	4.12	4.18	2.92	2.12
腎 結 核 の 疑	7	2	18	28	19	33	25	34	25	25	35	10	20
Follow-up 例													
残 腎 結 核	0	10	5	6	7	0	0	20	12	37	31	18	18
" の 疑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	4	2
外 科 的 治 癒	35	7	52	18	42	81	94	94	134	129	143	118	85
化 学 療 法 治 癒											4	7	7
結 核 性 尿 管 狹 窄		3		2					5		28	7	17
尿管・膀胱の形成術後 Follow-up		1							2	3	4	3	3
萎 縮 膀 胱	5	9	13		7	8	2	25	12	10	9	15	6
腎 摘 後 膀 胱 結 核 残 存	20	34	30	21	9					4	2	3	6
結 核 性 尿 道 狹 窄		3	1	9	12	12	4	5	7	7	2	1	2

本郷・高橋・松尾一最近3年間の尿路結核の臨床統計

1949年から1951年までを化学療法初期, 1952年以後を化学療法最盛期と称することにする。

臨床統計

1. 調査対象

調査の対象は1960年から1962年までの3年間に京都大学泌尿器科学教室を訪れた708例の尿路結核症の外来患者で, この中新来腎結核患者は259例, 前年度よりの Follow-up その他が449例である。

2. 頻度 (表1)

全尿路結核患者としては全外来患者8,559例中8.27%に相当する。新来腎結核患者のみをとると3.07%で, 多田統計の11.3% (化学療法期以前), 1949年から1951年の12.2% (化学療法初期), 大森統計の5.81% (化学療法最盛期) などに比べて実数, 比率ともに減少している。1950年以降の新来患者実数及び全外来患者に対する比率の年度別変動を図1に示す 外来患

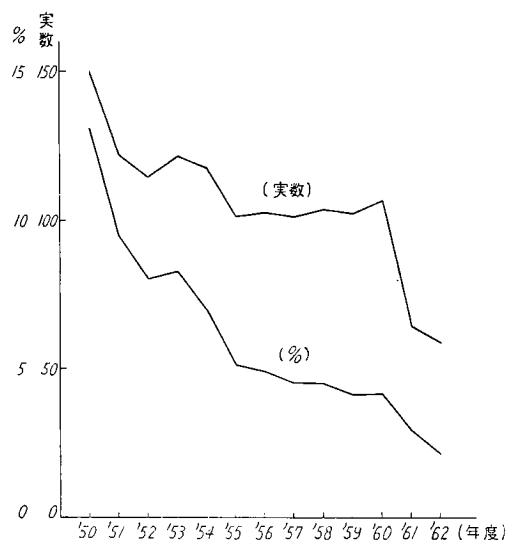


図1 尿路結核患者実数及び外来患者総数に対する比率の年度別変動

者の増加にも拘わらず実数は年々減少して居り, 従って比率の減少度は更に大である。特に1961年, 62年は著減している。

左右別の頻度を1950年来の新来腎結核患者についてみると, 総数1,195例のうち右腎結核が571 (47.8%) 左腎結核が624 (52.2%) で左に多くなっている。標準偏差の2倍で有意差の検定をすると有意の差があることになる。従来統計では右に多いとするものが殆んどで, 教室の多田統計でもわづかに右に多くなっている。

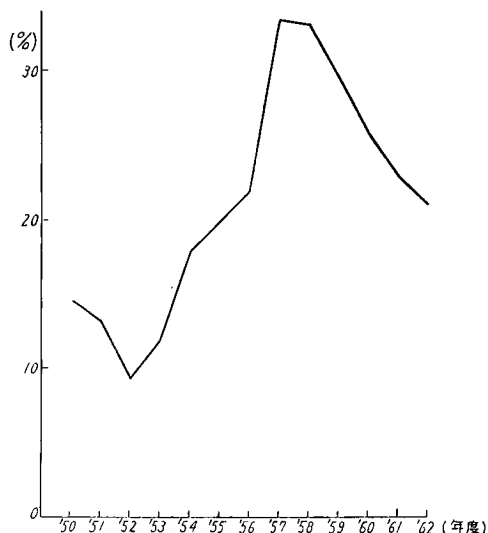


図2 尿路結核中の両側性腎結核頻度の年度別推移

両側性腎結核の頻度は表1, 図2に示す様に1957, 58年頃にピークを作り以後少しづつ減少して来ている。多田統計では, 4.1%, 大森の外来患者についての10.1%などに比べ最近3年間の平均は23.1%で相当ふえて来ている。なほ報告者により頻度の差が大きい⁹⁾がこれは調査母集団の差, 検査技術の差, 判定基準の差等によるものと思われる。

Follow-up 例は1958年まではどんどん蓄積しているが (表1), 以後は Follow-up 中止, 脱落, 来院頻度の減少, 転医などのため新しい例の追加との間に平衡状態を保つ様になつている。

尿路の結核性狭窄を来した例は表1に示す如くだが, 特に尿管狭窄等に於いては判定基準が一定でないので正確な資料とはなし難い。しかし化学療法初期の頃に比べると当然のことながら明らかに増加して居り, 最近3年間では全結核患者の8.4%, 新患を除いた Follow-up 例その他のうちでは14.2%に相当する。

全尿路結核患者について年令及び性別に頻度を調べると表2, 図3の如くなる。男子375 (52.8%) 女子333 (47.2%) で男子にやや多いが, 男子外来総患者5,903, 女子外来総患者2,656中では夫々5.91%, 12.5%に相当し, むしろ女子の率が大きくなっている。患者数の比は男/女=1.1/1で多田統計の3/1, 大森統計の1.2/1より更に男女差は少なくなっている。従来腎結核患者は男子に多いとされているが, これはあくまで絶対数における差であつて, 一般外来患者として男子が多いことに起因していると思われる。

表2 尿路結核患者の年齢別及び性別頻度

年齢 性別	0~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59	60~64	65以上	計
♂	0	1	7	30	59	52	51	60	36	29	23	13	6	8	375
♀	0	1	6	22	55	48	46	37	53	25	20	8	9	3	333
計	0	2	13	52	114	100	97	97	89	54	43	21	15	11	708

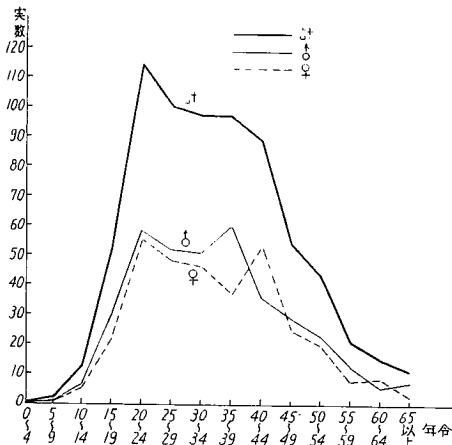


図3 年齢及び性別頻度

年齢分布では男女いずれも2峰性を示していることが大きな特徴である。即ち20~24才のピークのあと男子では35~39才に、女子では40~44才にピークがある。腎結核の壮年層への移行については大森統計でも

既にその傾向が見られ、最近では富川等⁹⁾が1952年から1961年の例について認めているが、比較的長期に亘るものであるためか、それほど顕著ではない。肺結核に於いては、すでに可成り前から2峰性分布が指摘されているが、腎結核も数年遅れてこの傾向を追っているのではないと思われる。又大森の指摘した女子の方が高年齢の方へずれる傾向は本統計でも認められる。男女総計で見るとピークはやはり20~24才(15.8%)で、20~44才が全体として大きな山となり好発年齢の巾が広がっている。壮年層のピークは男女でずれているため、全体としては、はつきりしたピークを示さないが、その傾向は認められる。20才台に多いのはWildbolz⁶⁾(1927)の時代から変っていない。わけだが、大森統計で35~39才が山の中に入り、本統計では更に40~44才までが好発年齢に含まれて来ている。60才以上が26例(3.7%)で、これは諸家の統計に比し相当高率である。10才未満は2例(0.28%)であった。

表3 主 訴 () 内は%

主 訴	腎 症 状	膀胱症状	尿 変 化	全身症状	性器症状	Follow-up	其 他	計
化学療法(+) (%)	6 (0.85)	11 (1.50)	5 (0.7)	3 (0.42)	3 (0.42)	391 (55.2)	22 (3.1)	441 (62.3)
化学療法(-) (%)	30 (4.22)	127 (18.0)	77 (10.9)	15 (2.12)	10 (1.44)	0 (0)	8 (1.13)	267 (37.7)
計 (%)	36 (5.07)	138 (19.5)	82 (11.6)	18 (2.54)	13 (1.86)	391 (55.2)	30 (4.23)	708 (100)

3. 主 訴 (表3)

全尿路結核患者について主訴を分類、表示すれば表3の如くである。腎症状とは腎部疼痛、緊張感、腫脹など、膀胱症状は排尿痛、頻尿、残尿感、膀胱部不快感、排尿困難など。尿変化は混濁、血尿など、性器症状は陰囊内腫瘍、血精液症など、全身症状は発熱、異和感、全身倦怠などである。Follow-upは自覚症状

なく経過観察又は化学療法のための来院しているもの、其の他は他医よりの紹介などである。化学療法(+)とはその年の初診までに化学療法を少くも3ヶ月以上うけているものである。うけているものは全結核患者中62.3%、うけていないものは37.7%であった。化学療法をうけている群は明らかに自覚症状を訴えるものが少くなっているが、うけているにも拘わら

ず何等かの自覚症状を有するものは化学療法群中11.3%であった。両群を通じて最も多いのは Follow-up について膀胱症状を訴えるもの19.5%で、これは Follow-up などを除いた自覚症状群中では 43.5% を占めている。膀胱症状以外の症状を主訴とするものは21.1%で自覚症状群中47.0%を占めている。主訴が膀胱症状であるものに、病歴中何等かの膀胱症状を訴えたものを加えれば、自覚症状中69.4%であり、従つて全く膀胱症状がないものが30.6%もあつた。このことについては合併症の項で再び触れる。尿変化を主訴とせるものは11.6%で自覚症状群中25.9%、腎症状は5.07%で自覚症状群中11.4%であつた。Follow-up は尿路結核患者の半数以上を占めていて、1950年の20%に比べ非常に増加している。

4. 尿所見 (表4)

表4 尿所見 () 内は583例中の%

尿所見 化学療法 の有無	蛋白尿, 膿 尿, 血尿, 膿血尿など	清 澄	計
化 (+)	112 (19.2)	283 (48.5)	395 (67.7)
化 (-)	170 (29.2)	18 (3.1)	188 (32.3)
計	282 (48.4)	301 (51.6)	583 (100)

全尿路結核患者のうち尿所見の明らかなものについて化学療法 (+) と (-) に分け、尿所見の有無を表4に示す。非化学療法群 188 例のうち殆んど大部分の 170 例 (94.0%) は尿に何等かの異常を認めるが、18 例 (6%) は初診時に於いて蛋白尿もなく全く尿に異常を認めず、他の検査で尿路結核が確認されたものである。このうち 6 例は閉鎖性又は閉塞性腎結核と考えられるもの、3 例は反覆検尿により尿に異常所見を得ている。あとの 9 例については原因不明である。又化

学療法群395例中283例 (71.5%) は清澄尿 (尿白尿もなし) であつたが、112例 (28.5%) には何等かの異常を認めている。

5. 合併症 (表5, 6)

a) 結核性尿路合併症: 新来腎結核患者 259 例のうち膀胱結核を合併するものは 151 例 (58.3%) である。大越⁹⁾によれば1946年から1951年の東大外来の膀胱結核合併率は97.0%であるから非常に合併率は減つて来ている。大森は膀胱に特異な結核性病変をもたない症例が年々増加していることを指摘し、1952年には 10.1%, 調査期間平均は21.2%であつたと述べている

表5 合併症 () 内は%

I 結核性尿路合併症	
膀胱結核 (新患について)	151 (58.3)
萎縮膀胱 (全尿路結核患者について)	30 (4.2)
尿管狭窄 (")	47 (6.6)
尿道狭窄 (")	5 (0.8)
II 結核性性器合併症 (全男子患者について)	
副睾丸結核	78 (20.8)
前立腺 "	54 (14.4)
精囊腺 "	6 (1.6)
III 非結核性尿路合併症 (全尿路結核患者について)	
尿路奇形	6 (0.9)
尿路結石	15 (2.1)
(このうち化学療法中〜後に発生したもの)	
	7 (1.0)
非特異性炎症	11 (1.6)
腎下垂	3 (0.4)
膀胱癌	2 (0.3)
IV 尿性器系以外の結核性合併症 (新患について)	
肺結核・結核性肋膜炎	13 (5.0)
骨・関節結核	8 (3.1)
結核性腹膜炎	1 (0.4)

表6 腎結核に合併した男性性器結核の頻度 () 内は%

報 告 者	調査対象年度	男子腎結核患者	副 辜 丸 結 核	前 立 腺 結 核	精 囊 腺 結 核
北 川, 岡 部	1920~1929	325	88 (27.1)	55 (17.0)	
多 田	1915~1947	1,703	348 (19.9)	249 (14.9)	
大 越	1946~1951	974	244 (25.1)	297 (30.5)	114 (11.7)
大 森	1952~1957	332	59 (31.9)	65 (35.1)	
著 者	1960~1962	375	78 (20.8)	54 (14.4)	6 (1.6)

が、著者等の調査期間を通じては41.7%と大巾に増加している。これは初診までに何等かの形で化学療法をうける率が増加したためであろう。従つて膀胱症状を訴えない腎結核患者が相当数見られたのもうなづけるが、診断上注意を要する点である。尿路の狭窄性変化についてみると、萎縮膀胱は全尿路結核患者中30例(4.2%)、尿管狭窄は47例(6.6%)、尿道狭窄は5例(0.8%)であつた。このうち尿管狭窄は診断基準が一定せず、見る人の主観により診断名を附されたり附されなかつたりするので、これを除いて萎縮膀胱+尿道狭窄の頻度をみると5.0%となり、1950年の2.4%に比し相当ふえている。これは化学療法の普及及びFollow-up 例増加に伴う当然の結果であろう。

b) 結核性性器合併症：我国の男子腎結核患者の結核性性器合併症についての各報告を表6に示す。大森の統計は入院患者を対象としたもので、他は外来患者についてのものである。前者に於いてやや合併症が高率となつているのは、ある程度選択されたものについて見ているからだと思われる。著者等の統計では副睾丸結核、前立腺結核、精囊腺結核は夫々20.8%、14.4%、1.6%となり、前2者については大森統計を除き、化学療法の以前以後を通じて著差を認めない。精囊腺結核については診断基準が各人で一定しないので正確な%は出ないし、各報告者間の比較もあまり意味がない。腎結核を伴わないものも含めた全副睾丸結核としては過去3年間に194例あり、腎結核を伴うものはそのうち20.8%を占め、前立腺結核については88例あり、腎結核を伴うものはそのうちの61.3%であつた。以上の如く男子に於いては性器結核の合併は比較的高率であるが、化学療法の以前以後を通じあまり比率の変動は見られないようである。

c) 非結核性尿路合併症：腎結核と尿路結石の合併については、Frerichs⁹⁾(1882)の剖検例の報告、Frank⁹⁾(1891)の臨床例の報告以来数多くの症例が報告されているが、特に化学療法期以後はその頻度が増してきた様に思われる。頻度についてはHowald⁹⁾(1929)の1.4%、大越他の調査⁹⁾(1928—1938の東大入院患者)では0.58%、多田統計の0.9%などが化学療法期以前のものであるが、以後のものでは大森統計の1.8%、著者等の2.1%と以前のものに比べ明らかに増加している。化学療法期以前には1%前後であつたものが、以後には2%程度にふえてきていると考えられる。

合併をみた15例のうち化学療法を行う前にすでに結石を合併していたものは5例(0.71%)で、化学療法中〜後に発生を見たものは7例(1.0%)、不明もの3

例であつた。この数値からみると化学療法発生を助長する様に思われるが、この原因としては1) 治療過程とともに尿路の狭窄性変化が進展して尿停滞を起す、2) カルシウム摂取多量、3) 尿中膠質に対する影響などが考えられるが、いづれも憶測の域を出ない。

この他非特異性炎症が11例(1.6%)、尿路奇形(主として重複腎盂及び尿管)が6例(0.9%)、腎下垂が3例(0.4%)、膀胱癌が2例(0.3%)に見られた。

d) 尿性器系以外の結核性合併症：最も多いのは肺結核及び結核性肋膜炎で新来患者259例中13例(5.0%)、次いで骨関節結核の8例(3.1%)、結核性腹膜炎1例(0.4%)であつた。多田統計では結核性肋膜炎54.3%、肺結核31.0%、骨関節結核2.8%という数値をあげているが、これと比較すれば明らかに胸部結核症の合併は著減している。しかし外来カルテについての調査であるので、時に記載が不十分〜簡単な事もあり、又全例胸部レ線検査を行つていないわけでもない、もし精査すれば更に高率になると思われる。

6. 治療(表7、8、9、図4)

過去3年間の新来患者の治療法別頻度を表7に示す。転医又は来院しない経過不明のものを除いた231例中化学療法のみによつたものは145例(62.5%)で、手術的操作を加えたものは86例(37.5%)であつた。化学療法に於いて使用せる薬剤はS、M、I、N、A、H及びその誘導体、PAS、PZA、Kanamycinなどで3者併用の場合はSM、PAS、INAH.系薬剤を用い

表7 治療

療 法 別		年 別			
		'60	'61	'62	計
化 学 療 法	単 独	1	1	0	2
	2 剤 併 用	10	0	1	11
	3 剤 併 用	50	53	25	128
	2〜3 剤 + コーチゾン 併用	0	0	4	4
	小 計	61	54	30	145
手 術 的 療 法	腎 摘 + 化学療法	35	24	24	83
	腎部分切除 + 化学療法	1	0	1	2
	空洞切開 + 化学療法	0	1	0	1
	小 計	36	25	25	86
総 計		97	79	55	232

る事が最も多い。Tb-1 は最近は全く使用されていない。表中にあるコーチゾン系薬剤を併用する場合は全て Dexamethazone の形で用いている。表に見る通り何等かの副作用が認められた場合以外は殆んど3者併用によつてゐる。投与期間はいつでも1〜2年間を目標にしている。

治療に於ける新しい動向としてコーチゾン系薬剤の併用がある。この可否については色々論議されて来たが、実際に使用してみて有効なことが多く、このことは片村等¹¹⁾が既に報告している如くである。使用頻度は過去3年間に新来患者4例、前年度よりの Follow-up 例5例、術後例2例、計11例であるが、使用目標

も従来の様に狭窄性変化の治療或いは予防という面だけでなく、抗結核剤の病巣内濃度を高めて積極的に結核の治療を促進し、治療期間を短縮する意味で、又頑固な熱発をくり返す患者或は全身的に消耗状態の患者に対症的に用いて顕著な効果を収めている。これ等の効果が統計学的数字に現われるのは将来のことに属するが、今後その使用頻度は増加していくであろう。

新来患者の手術的治療の分類は表7に示す通りである。86例中 Kavernotomie の1例、腎部分切除術の2例以外は全て腎摘除術である。腎摘除数の年度毎の推移を表8、図4に示す。実数及び新来患者に対する比率はともに、年を追つて減少し1952年には新来腎結

表8 手術的治療の推移

年 度	'52	'53	'54	'55	'56	'57	'58	'59	'60	'61	'62
腎摘除術	69	61	55	55	48	51	43	48	35	24	24
新来腎結核患者数	129	142	135	102	105	102	107	105	113	79	67
%	53.5	42.9	40.7	54.0	45.7	50.0	40.1	45.7	31.0	30.4	35.8

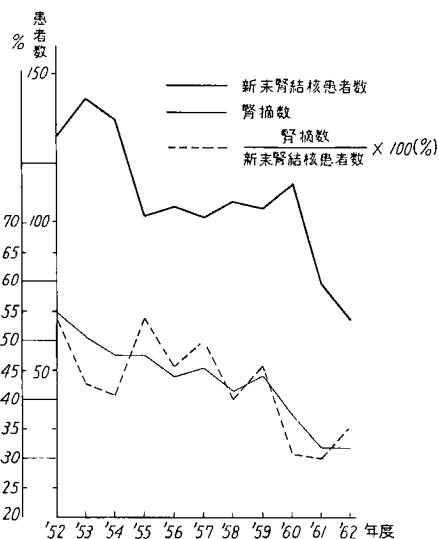


図4 腎結核患者数及治療の状況

核患者のほぼ、1/2 に腎摘除術を行つていたが、最近3年間では 1/3 に減つてゐる。結局ケースがよく撰択され、化学療法の範囲が拡大されつつある事を示すもので、この事は後述の摘除病変程度の項でも確認されている。

前年度より Follow-up している 419 例についての治療法別分類を表9に示す。狭窄性変化に対し尿路変更〜形成手術を行つてゐるものは6例 (1.4%)、ブジ

表9 経過追求め症例の治療

	'60	'61	'62	計
尿路変更 又は 形成手術	3	1	2	6
Follow-up 又は 化学療法継続中	145	144	120	409
ブジ	2	1	1	4
計	150	146	123	419

ーを行つてゐるものは4例 (1.7%)、その他は化学療法或は単に経過観察のみのものである。

7. 摘除腎病変程度 (表10, 図5)

井上¹⁰⁾による摘除腎病変程度の分類法に従つて摘出腎を A〜F に分類し、大森統計と比較して表10, 図

表10 摘腎病変程度

程度	A	B	C	D	E	F	計
期別							
最近							
計	1	0	10	31	23	19	84
%	0.2	0	11.9	36.9	27.4	22.6	100
大森							
計	13	17	73	116	53	60	332
%	3.8	5.0	21.5	34.2	15.6	17.7	100

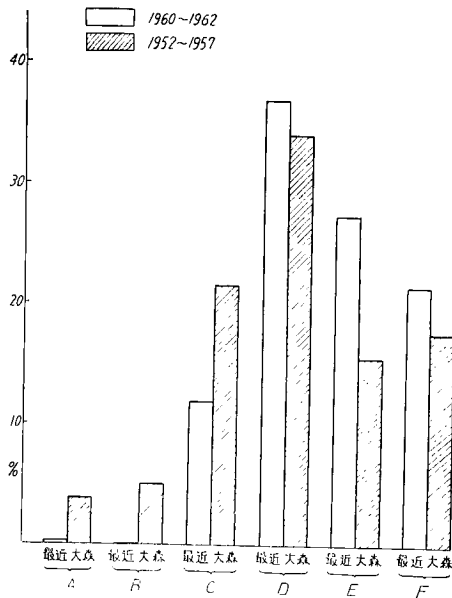


図5 摘腎病変程度 %グラフ

5に示した。これ等から明らかな様に初期病変であるA, Bは最近では殆んど摘出されていず、高度病変であるD, E, Fは摘出率がふえている。つまり初期病変のものは化学療法のみで治療されているわけで、化学療法の範囲の拡大とケースの撰択が正確になされていることを示している。

総 括

1. 1960年より1962年に至る3年間の京都大学泌尿器科外来を訪れた腎結核708例について調査を行った。頻度その他の臨床的事項について統計的観察を行い、主として教室の以前の統計と比較した。

2. 全外来患者中、全尿路結核患者は8.27%、新来腎結核患者は3.07%であつた。実数、比率ともに年々減少しているが、特に1961年来著減している。将来も減少していくものと思われる。

3. 左右別では従来との報告と異なりわずかに左腎に多かつた。

4. 両側性腎結核は23.1%に認め増加して来ている。

5. Follow-up 例は1958年まで蓄積していたが、以後は新来患者との間に平衡状態を保っている。

6. 結核性狭窄性変化を来した患者は全尿

路結核患者の8.4%で、Follow-up 例中では14.2%であつた。

7. 性別では絶対数では男子にやや多く、男女の比は1.1:1であつた。

8. 年齢別分布は男女 いづれも2峰性となり、男子では20~24才、35~39才に、女子では20~24才、40~44才に夫々ピークを有する。全体としては壮年層も好発年齢に含まれる様になつて来ている。

9. 膀胱症状を主訴とするものは自覚症状群中43.5%であつた。病歴中、膀胱症状の全くないものは30.6%あつた。病像の非定型化の徴候と見られる。

10. 非化学療法群188例中18例(6%)は尿に異常所見を認めなかつた。化学療法群395例中112例(28.5%)の尿は異常所見を認めた。

11. 新来腎結核患者のうち膀胱結核を合併するものは58.3%で、残りは膀胱に特異な結核性変化を認めていない。初診までに何等かの形で化学療法を受ける率が増加したためと考えられる。

12. 副睾丸結核、前立腺結核、精囊腺結核の合併率は夫々20.8%、14.4%、1.6%であつた。

13. 尿路結石の合併率は2.1%であつた。化学療法期以前には1%前後であつたのに比べ増加を見たのは、化学療法が原因している様に思われる。

14. 胸部結核の合併率は5.0%で非常に少ないが正確なものではない。精査すれば更に高率となるであろう。

15. 抗結核剤にコーチゾン系薬剤の併用頻度が増加している。その有効性に鑑みて向後更に使用頻度は増すであろう。

16. 新来患者の手術的治療施行率は年々減少している。化学療法の適応範囲が広がられつつあることを示している。

17. 摘出腎病像を分類すると、初期病変のものは殆んど見られない。これも化学療法適応範囲の拡大を示している。

稿を終るに際して恩師稲田教授の御指導、御校閲を深謝する。

文 献

- 1) 多田：泌尿紀要，1：1，1955.
- 2) 大森：泌尿紀要，5：293，1959.
- 3) 柿崎：日本泌尿器科全書，IV，金原出版，東京，昭34.
- 4) 富川他：日医新報，1999：10，昭37.
- 5) Wildbolz, H. Handbuch d. Urol., Bd.

IV, 1927.

- 6) 大越：腎結核，医学書院，東京，1954.
- 7) Frerichs : Howald, R.⁹⁾ より引用.
- 8) Frank : 多田¹⁾ より引用.
- 9) Howald, R. : Z. Urol. Chr., 27 : 119, 1929.
- 10) 井上：皮紀要，8：627，大15.
- 11) 片村他：第21回日本泌尿器科学会関西地方会にて発表.

健保採用

基準薬価

消毒用 1g 5円30

産科用 1ml 3円70

《英国 I. C. I. 社提携—ヒビテン主剤》

使いやすい クリーム状の 強力な持続性・殺菌消毒剤

外科 その他—消毒用・ハンドクリーム用に…

ヒビテン[®]消毒用クリーム

Hibitane Antiseptic Cream

ヒビテン・ジゲルコネート1%：チューブ入50g

産婦人科用に使いやすい

ヒビテン[®]産科用クリーム

Hibitane Obsteric Cream

ヒビテン・ジゲルコネート1%：ポリエチレン容器入 100ml・300ml

- 強力で広範囲な抗菌力
- 作用が早く すぐれた持続効果
- 耐性を生じない
- 血液・血漿その他の体液中でも有効
- 抗生物質やサルファ剤と併用できる

【用途】

1. 外科における術前の手指消毒
2. 手指洗滌後のハンドクリーム
3. 創傷の感染予防および治療
4. 火傷皮膚面の感染予防と治療
5. ひげそり後の皮膚の感染防止

【用途】

1. 陰検査時の消毒
2. 分娩時産婦の皮膚および膣口周囲の消毒



大阪市東区道修町2丁目40

住友化学工業株式会社 医薬事業部

販売元 稲畑産業株式会社